

議長定例記者会見の概要 (2月定例会)

日 時：令和5年3月14日(火)
12時11分～12時27分
場 所：議長応接室



【2月定例会を終えての議長所感】

(中野議長)

お集まりいただきましてありがとうございます。

今定例会は、任期4年間最後の定例会でした。

私も議長に就任して丸2年になりますが、この間、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大が続き、本県経済も大きな影響を受けてきました。

コロナについては、何回も補正予算を審議してまいりました。大変厳しい状況ではありますが、県民生活、経済活動の本格的な回復、そしてさらなる活性化に向けて、執行部とともに全力を注いできました。

3月2日には本県独自の医療警報が全て解除され、昨日からはマスクの着用も任意となりました。5月8日からは感染法上の分類が5類に変わるといった、新たな局面に入る予定になっています。

こういった状況ではありますが、物価高騰や台風災害の影響で、県民生活、経済活動は深刻な状況が続いています。引き続き、宮崎再生への取組について、県民目線に立った徹底した議論を行い、県議会に課せられた責任、チェック機能を果たしていかなけれ

ばならないと思います。

嬉しい話題としては、宮崎牛が4大会連続で内閣総理大臣賞を受賞し、おいしさ日本一が証明されました。今後とも、この宮崎牛をアピールしていかなければならないと思います。

また、現在、WBC日本代表が素晴らしい活躍をしています。宮崎でキャンプをしていただきました。これもありがたいことでした。

来月にはG7宮崎農業大臣会合が予定されています。国内有数の農業県である本県にとって、食料安全保障など国際的な議論が行われることは、非常に有意義なことだと思っています。また、本県の農業を海外にいろいろと紹介するには大変よい機会であり、チャンスだと捉えております。本県の魅力が世界に広く発信されることを期待します。

このほか、宮崎カーフェリー新船2隻の就航や東九州道の開通もありました。高速道路の整備については、引き続き全力で取り組んでまいりたいと思っています。

県議会においては、議会改革・活性化の取組の一つとして、議会のICT化を進めてきました。昨年11月の常任委員会及び特別委員会において、タブレット端末を使い、資料閲覧の試行を行いました。

また、今定例会において、オンラインでの委員会出席に関する条例の改正を行いました。来年度は委員会におけるタブレット端末の導入が本格化しますが、引き続き取組を進めていきたいと思っています。

最後に、報道の皆様には、議長としての任期の期間お世話になりました。改めて感謝を申し上げます。

【質疑応答】

(宮崎日日新聞)

県議会のICT化について、副議長はその取組を取りまとめる立場だと思いましたが、これらの取組について、二見副議長はこれまでの議会をどう総括されますか。

(二見副議長)

議会のICT化の取組は、数年前からずっと、いろいろと議論を積み重ねてきて、今回のタブレット導入に至りました。この間、議員や会派間の調整があったり、議員から様々な意見が出たりもしました。

ただ、「これからの新しい時代に向かって、議会として前に進んでいきましょう」という一つ大きな視点を持って取り組んで、多くの議員の理解をいただけたことは非常によかったと思います。このコロナ禍という大きな社会的試練が推進のきっかけになったことも確かだと思いますが、一つ一つの議論が前向きに出来たこと、また、多くの議員の協力を得られたことはよかったです。

実際に導入してみて、今後はいろいろな諸課題も出てくるだろうと思います。先日の委員会でも、私が使うタブレットが、準備に10分ぐらいかかってしまいました。委員会が始まる前に確認しなければならないこともあるでしょう。

それぞれの議員が感じられることもあると思うので、次期の議員の間で、どうすればよい取組になっていくかという議論が、またさらに深まっていくことを期待しています。

(宮崎日日新聞)

今回、9名の議員が引退されるという、節目にもなる議会だったかと思えます。

そういった意味では、政治・議会が成熟した時期に差しかかってきたのではないかと

と思いますが、9名の議員が引退されるということをお伺いします。

(中野議長)

4年間のほとんどがコロナ禍に見舞われ、活動も制限されましたが、いろいろな問題を議論する場は、非常に多かったと思っています。

今回、9名の議員が勇退されますが、惜しい人材が議会被去られるという気がします。

しかし、議会というのは新陳代謝も深めていかなければなりません。勇退される議員がいる一方で、新しい議員も入ってくるわけですから、世代交代の時期に差しかかっているのだなという気がします。中には期数がそう長くない人も勇退されますから、どうということとは言えないかもしれませんが、大きな世代交代であるかなという気がします。

(UMK)

さきほどの本会議で、議長がぐっところられているように見えたのですが、その思いをお聞かせください。

(中野議長)

9名の仲間がこの議会被去るということ、また、3名の副議長が私を支えてくれたことなど、様々な思いもあって、ちょっと言葉が詰まってしまいました。

(UMK)

前回、前々回の県議選は無投票の選挙区が多く、県議会の在り方をメディアも取り上げました。

今回の県議選は、非常に多くの人たちが手を挙げている状況で戦うこととなりますが、議長はこの変化をどのように感じていますか。

(中野議長)

議会というのは、継続性も大事だと思います。勇退される議員も多いですが、ほかの議員も皆再選されれば、かなりの人数が残ります。

一方で、新しい候補者を見れば、政党数も増えています。結果がどうなるかは分かりませんが、非常に議会が活性化し、侃侃諤諤・喧喧囂囂の議論がなされていくのではないかと期待もしています。

(UMK)

立候補者の立場として、54人という多数の立候補者が戦いの場に出てくるということについて、どのように感じていますか。

(中野議長)

いつも言われていることは無投票の問題などであったりしますが、今回は、戦う候補者が非常に多いということで、それだけ政策論争がされるわけです。無投票の選挙区も含め、これを経て当選された皆さんが、これからの県政運営に参画してくれるということになりますから、大変いいことではないかと思っています。

ということで、次の議会は、このような当選された議員の声が反映される議会であってほしいと思っています。

(二見副議長)

今回は、それぞれの地域で、いろいろな政党から立候補される方が多いのではないかと感じます。もちろん無所属の方もいらっしゃると思いますが、そのような方も全くの「無所属」ということではなく、何らかの地盤・基盤を持ちながらの無所属ではないのかと思います。

この3年間のコロナ禍の中で、社会のいろいろなところで、どうしても政治の力が行き届かないところもあったと思います。そのような、それぞれいろいろな有権者の意見を伺う中で、国政、県政、また市町村の政治の中に反映させるべき意見がある、伝えていきたい、という思いが、このような多くの立候補につながってきているのではないかと、個人的には感じています。

(宮崎日日新聞)

副議長に県議選を踏まえてお伺いしたいのですが、議会改革については、投票率低下の問題や、県議会の存在などを踏まえ、ずっと進められてきたと思います。副議長はその議論を取りまとめる立場でしたが、今期4年のうち3年間はコロナ禍という状況で、デジタル化が進み、有権者・県民との距離はどのように変化してきましたか。

議論の内側から感じている範囲で構いませんが、学生が傍聴に来るなどの取組が行われる中で、この4年間、距離感がどう変化してきたのかお聞かせください。

(二見副議長)

県議会で行き届かなくて来たインターンシップの受入れもありましたし、それぞれの議員も個別に大学生を受け入れるなどしていました。県議会という、県政が動いている現場をいかに知ってもらおうかということが、一番大事なのだろうと思います。自分たちのこれからの生活のことが決まっていく現場を実感することで、ただの無関心ではいけないと感じられるのではないのでしょうか。

世代が上がるごとに投票率が上がっているように、生活していると、いろいろなところで考える場面があります。そのときに、市町村や県、国が、どのように絡んでくるかが分かります。ここが大事なんだということに意識が動いたときに、有権者としての「芽生え」が出てくるのだろうと思います。

県議会としては、そういう芽が出てくる「種つけ」の機会をどのように提供できるかが、課せられています。それは、大学や高校へ出前講座に行くなど地道な取組を続けていくことでしょうし、後に大きな変化につながっていくのではないのでしょうか。

ここ数年来、このような取組を進めていますから、これがどのような形で実っていくか、楽しみにしています。